

土器棺の入棺儀礼

— 「口頸部打ち欠き棺」の検討 —

角 南 聡一郎

Soichiro SUNAMI

I. はじめに

本稿では、土器棺に残された痕跡を手がかりとして、果たして土器棺へいつ遺体が入棺されたかという疑問について考古資料から推測し、更に土器棺へ「子供」が埋葬される際におこなわれていたと想定される葬送儀礼について考察することを目的とする。

これまでに筆者は、土器棺葬の様々な側面について考察を試みてきた。その中で、かつて土器棺内に遺存した遺体についても西日本全域で、事例を集成し検討をおこなったことがある。この際、いつ遺体は土器棺に入棺されたのかという疑問が沸き、この問題についての先学の説を若干紹介したことがある（角南 1999a）。本稿では更にこの問題について言及してみようと思う。どうした意識でいつ遺体が棺へと納められたのか。その時には、何らかの儀礼行為がおこなわれるものだったのか、色々と思っただけは巡る。つまり土器棺葬にも後世の「入棺作法」のような入棺の際、一定の儀礼のための作法（藤澤 1998）、つまりマニュアルのようなものが存在したのであろうか。もし存在したとすれば、どのようなものだったろうか。以下、具体的に考古資料から考えてみよう。

II. 土器棺入棺儀礼の認識

土器棺葬の研究では、これまでどのように遺体と棺との関係が想定され、どのような儀礼行為が介在したと考えられてきたのだろうか。以下研究史を振り返ってみよう。

土器棺葬における「棺」と「亡骸」について、初めて問題にしたのは六車恵一である。六車は香川県大川郡大川町に所在する、弥生時代終末～古墳時代初頭の墳丘墓である大井遺跡出土の第三号土器棺について紹介した。棺身に使用された壺は口頸部が打ち欠かれていた。しかし、すぐ側で口頸部が発見された。この点について「遺骸（洗骨、風葬を考えないで）は最初から壺に収納して埋葬地まで搬入したのではなく、遺骸と完全な壺を別々

に持っていき埋葬地で壺を必要だけ口縁部を打ち欠き取めたと解釈する方が極く自然とおもわれるのである」とした（六車 1961）。

また柳瀬昭彦は、岡山市百間川原尾島遺跡から出土した壺棺Ⅱについて考察した。ここで柳瀬は「壺棺Ⅱは長頸壺の頸部をわずかに残すところから上を切り離し、その切り離された口頸部分を蓋である鉢形土器の上に重ねて置くという特異な有り方を示している。これは、その配置は別としても、本来完形であった器を、棺にする目的で人為的に打ち欠いて分離させたことを意味している。（中略）土器から棺への変貌が完形の土器を打ち欠くという行為そのものにあったのか、あるいは打ち欠いた行為が中に入れるもの（遺体）の大きさに規制されたことの所産であるのかは断定できない。しかしながら、前出の遺跡において弥生時代中期末の甕身に完形が多く、後期前半の壺身に打ち欠き行為が多いという傾向にあることからすれば、弥生中期末～後期の甕と壺に表われる形式変化に対応した棺としての器の大きさが選ばれた結果、遺体の大きさに規制された可能性が高い」とした（柳瀬 1980）。弥生時代中期末～後期の棺身の甕から壺の変化に注目した点は、その後の研究に大きな意味を持つ意見であった。

土器棺に限定したものではないが、古墳の棺の埋置と遺体の埋納については和田晴吾の設定したモデルがある（和田 1989,1995）。和田は「古墳祭祀に係わる一連の行為は、墓域の選定にはじまり、葺石や埴輪といった外部施設の整理まで、要所に火や土器などを用いた何らかの儀礼を幾度もはさんで進行し最後に古墳完成の儀礼でもって一通り完了するものと推察される」とし、棺は遺体を納めて持ちこぶもの（「持ちこぶ棺」）ではなく、特定の場に据えつけられ、そこに遺体を納めるもの（「据えつける棺」）として機能していたのであると考え、古墳時代の棺は、弥生時代の棺の伝統を受け継ぎ、据えつける棺として出発したと考えた。

亀山行雄は津寺遺跡西川調査区土器棺墓-13では、打ち欠いた（壺の）口縁部の破片が墓坑内から見つかっており、土器を打ち欠いて棺として組

み合わせる一連の行為が埋葬地で行われていたことを示唆するものと評価した(亀山 1995)。これは、木棺・石棺を問わず当時の棺が埋葬地において組み立てられた、先の和田が提唱するいわゆる「据えつける棺」であったことを思えば容易に理解できるとした。亀山のこの考えは土器棺と遺体は別々に埋葬地へと運ばれることを棺の性格から想定した見解といえる。

深江英憲は畿内中期の区画墓に伴う土器棺墓を分析した。ここで台状部・周溝内・周溝外で棺として使用された土器に対する焼成後穿孔の有無について分類し、特に台状部に埋葬される土器棺には、穿孔例が非常に少ないことを示した。この理由として供献土器や葬送儀礼と関係した土器を、土器棺として転用したことを推測している(深江 1994)。この研究は土器棺に転用された土器を、入棺儀礼行為の一部で使用したものと捉えた点で高く評価できる。

現状では、岡山県域の土器棺葬の場合、棺と遺体が別々に埋葬地まで運ばれていったと理解されているようである。遺体が入棺される際に、埋葬地で棺となる土器を打ち欠いていることが多く、近畿地方では、方形周溝墓の葬送儀礼と土器棺の埋葬が連動した可能性が強い。こうした問題点を整理すると、以下のように問題点を要約することができる。時期別にはどのように棺への打ち欠き行為が認められるのか、地域的には岡山県域とその周辺のみなのか、周辺地域との関係はどうか。どのように打ち欠き行為をとらえるか、ただ単に余分な口縁、口頸部の切除・転用という理由だけなのか。儀礼的行為とは考えられないのだろうか。浮かび上るこれらの点について以下検討をしてみよう。

そこで本稿で用いる方法について簡単に明示しておこう。本稿では弥生時代～古墳時代前期にかけての土器棺葬に用いられた土器の口頸部が打ち欠かれ、その口頸部が様々な状態で出土した資料を網羅し、その分布を確認する。さらにそれぞれの土器棺の立地、棺の法量、器種組成などについて検討する。更に口頸部の利用形態からいくつかのパターンを認識し、そ

の背景について考察したい。

次に本稿における仮設の設定をおこないたい。弥生時代中期の土器棺棺身の甕主体の選択意識から、弥生時代後期の壺主体の選択意識の変化の背景については、単なる遺体のサイズの問題だけではなく、棺身に壺を採用することによって、入棺の際に壺の口頸部を打ち欠き、廃棄する、破砕してしまう、棺上に供える、といった儀礼的行為が介在したのではなかろうか。ここでは以下これらの打ち欠かれた口頸部と胴部が出土した棺を「口頸部打ち欠き棺」と仮称して、検討をおこなっていく。

Ⅲ. 「口頸部打ち欠き棺」の諸例

本稿では、弥生時代～古墳時代前期の西日本各地の「口頸部打ち欠き棺」の事例をやや詳しく概観し、その具体的様相を掌握してみたい（図1～4，表1）。

【立野遺跡】福岡県甘木市に所在する。古墳時代前期の12号方形周溝墓の北周溝内に埋葬された壺棺墓は、棺蓋は検出されていない。棺身に使用された壺は胴部下に径8mm程の焼成後穿孔をし、底部は打ち欠くが穿孔までは至らない。内面に黒色顔料を塗布し、外面にも塗布されたと見られる痕跡があるがはっきりとはしない。棺を埋設した後、白色粘土を被覆していたらしい。壺棺からやや離れた東溝底で、直接接合できないが、口縁部片が出土した。棺に使用された土器は畿内的な特徴を備え、在地的色彩を脱却した段階のものである。このことから壺棺墓の時期は古墳時代前期と思われる。

【朝田墳墓群】山口県山口市の弥生～古墳時代にかけての墓域である。壺棺墓は、単独で存在し棺蓋に鉢、棺身に壺を使用する。棺身の壺胴部には約6cmの焼成後穿孔され、この穿孔部は上方を向く状態で埋置されていた。また底部にも穿孔には至らないものの、焼成後の剝離痕跡が認められる。壺は口頸部より打ち欠かれており、口縁部は棺付近で採集された。

表1 「口頸部打ち欠き棺」一覧

番号	遺跡名	所在地	遺構名	時期	棺高	棺最大径	立地	埋葬形態	器種組成	出土類型	備考	文献
1	立野	福岡県甘木市	12号方形周溝墓壺棺	古・前	53.5	51	A 2	斜位	I 7	ほ	胴部に焼成後穿孔、内面に黒色顔料塗布	児玉編1984
2	朝田墳墓	山口県山口市	壺棺墓	弥・後・後	55	45	E 1	横位	I 4	に	棺身使用壺胴部に焼成後穿孔	山本ほか1983
3	追迫	山口県熊毛郡熊毛町	2号壺棺墓	弥・後・後	52	38.2	E 2	斜位	I 2	に	土器棺墓5基により墓域を形成	山本・前島1978
4	天王	山口県熊毛郡熊毛町	1号壺棺墓	弥・後・後			E 2	斜位	I 1	は	土器棺墓3基により墓域を形成	谷口編1988
5	寺迫	広島県広島市安佐北区	2号土器棺墓	弥・後・中	43.5	42.2	E 2	横位	I 8	い	土器棺墓2基、土器蓋土坑墓1基によって墓域を構成	楢垣1977
6	稗畑	広島県広島市佐伯区	1号土器棺墓	弥・終～古・初	40	41.4	B	斜位	I 1	は	土坑墓とともに墓域を構成	福原1992
7	寺山	広島県広島市安佐南区	第1号土器棺墓	弥・終～古・初	36.2	33.3	E 2	横位	I 1	は	第2号テラス状遺構に第2号土器棺墓とともに埋置	高下編1997
8	百間川原尾	岡山県岡山市	左岸用水壺棺Ⅱ	弥・後・前	41.2	40.1	E 2	斜位	I 4	い	土器棺墓3基により墓域を形成	柳瀬ほか1980
9	百間川兼基	岡山県岡山市	土器棺2	弥・後・中	42	44.2	E 1	斜位	I 4	は	棺身使用壺胴部に焼成後穿孔	平井編1996
10	鹿田	岡山県岡山市	土器棺-2	弥・後・前	37.8	39.9	E 1	斜位	I 4	は	棺内から生後数ヶ月の乳歯が10数点出土	山本ほか1988
11	津寺	岡山県岡山市	土器棺墓-13	古・前	28	29	E 2	斜位	I 1	に	土器棺墓10基により墓域を形成	龜山ほか1995
12	津寺	岡山県岡山市	土器棺墓-16	弥・終～古・初	31	37	E 1	斜位	I 8	は		龜山ほか1998
13	津寺	岡山県岡山市	土器棺墓-17	弥・終～古・初		30.4	E 1	斜位	I 4	は		龜山ほか1998
14	加茂政所	岡山県岡山市	土器棺墓3	弥・後・中	60.2	51.4	E 2	斜位	I 4	い	土器棺墓11基により墓域を形成	平井ほか1999
15	加茂政所	岡山県岡山市	土器棺墓5	弥・後・中	61.8	60	E 2	斜位	I 4	は	土器棺墓11基により墓域を形成	平井ほか1999
16	加茂政所	岡山県岡山市	土器棺墓7	弥・後・中	40.6	42.6	E 2	斜位	I 4	は	土器棺墓11基により墓域を形成	平井ほか1999

番号	遺跡名	所在地	遺構名	時期	棺高	棺最大径	立地	埋葬形態	器種組成	出土類型	備考	文献
17	加茂政所	岡山県岡山市	土器棺墓11	弥・後・中	52.2	58.8	E 2	斜位	I 4	は	土器棺墓11基により墓域を形成	平井ほか1999
18	用木第4号墳	岡山県赤磐郡山陽町	第14主体	古・前	22.5	30.5	D 2	直位	I 4	ろ		神原1975
19	前山	岡山県都窪郡山手村	土器棺墓12	弥・後・中	53	44	B	斜位	I 4	に	棺蓋使用鉢の内外面に赤色顔料の塗布	物部編1997
20	有本	岡山県津山市	土器棺 2	弥・後・前	39.5	47.5	B	斜位	I 7	ろ	土坑墓とともに墓域を構成	小郷1988
21	稲木	香川県善通寺市	第7号壺棺墓	弥・後・前		39	E 2	斜位	I 2	に	土器棺墓4基により墓域を形成	西岡ほか1989
22	大井	香川県大川郡大川町	第三号棺	弥・終～古・初	44	48	C 2		I 1	に	弥生墳丘墓の主体部として埋置	六車1959
23	下ノ坪	高知県香美郡野市町	壺棺 2	弥・後・前	49.7	40.6	E 2	斜位	I 2	は	土器棺墓2基によって墓域を構成	出原編1998
24	池上北	兵庫県神戸市西区	ST01	弥・後・前	29.8	28.6	E 1	直位	I 3	い		菅本1986
25	魚崎中町	兵庫県神戸市東灘区	SK3	弥・終～古・初		53	E 1	斜位	I 1	ろ		岩田1997
26	口酒井	兵庫県伊丹市	壺棺墓	弥・終～古・初	41.2	39.6	E 1	斜位	I 8	ろ		森下ほか1988
27	口酒井	兵庫県伊丹市	壺棺 1	弥・終～古・初	45	58.5	E 2	斜位	I 1	ろ		小長谷1995
28	奈カリ与	兵庫県三田市	2号土器棺	弥・中・後			E 1	横位	I 7	は		井守編1983
29	新宮東山1号墳	兵庫県龍野市	1号土器棺	弥・終～古・初		40.5	C 4	斜位	I 1	に	古墳周溝外に土器棺のみ群を構成して埋置	岸本編1996
30	新宮東山1号墳	兵庫県龍野市	2号土器棺	弥・終～古・初	34	32	C 4	斜位	I 1	に	古墳周溝外に土器棺のみ群を構成して埋置	岸本編1996
31	新宮東山1号墳	兵庫県龍野市	3号土器棺	弥・終～古・初	63	56.5	C 4	斜位	I 4	は	古墳周溝外に土器棺のみ群を構成して埋置	岸本編1996
32	巨摩・北若江	大阪府東大阪市	3号方形周溝墓第7主体部土器	弥・後・前	36.4	44	A 1	斜位	I 2	ろ		三好ほか1995
33	東奈良	大阪府茨木市	ST-01	弥・終～古・初		48	E 1	斜位	I 1	ろ		濱野・中東1991

番号	遺跡名	所在地	遺構名	時期	棺高	棺最大径	立地	埋葬形態	器種組成	出土類型	備考	文献
34	纏向	奈良県桜井市	壺棺	弥・終～ 古・初		40.4	E 1	斜位	I 7	は		萩原1982
35	西山	奈良県宇陀郡 榛原町	SX-01	弥・終～ 古・初	47	51.3	E 1	斜位	I 2	ろ		楠本編1987

《立地》

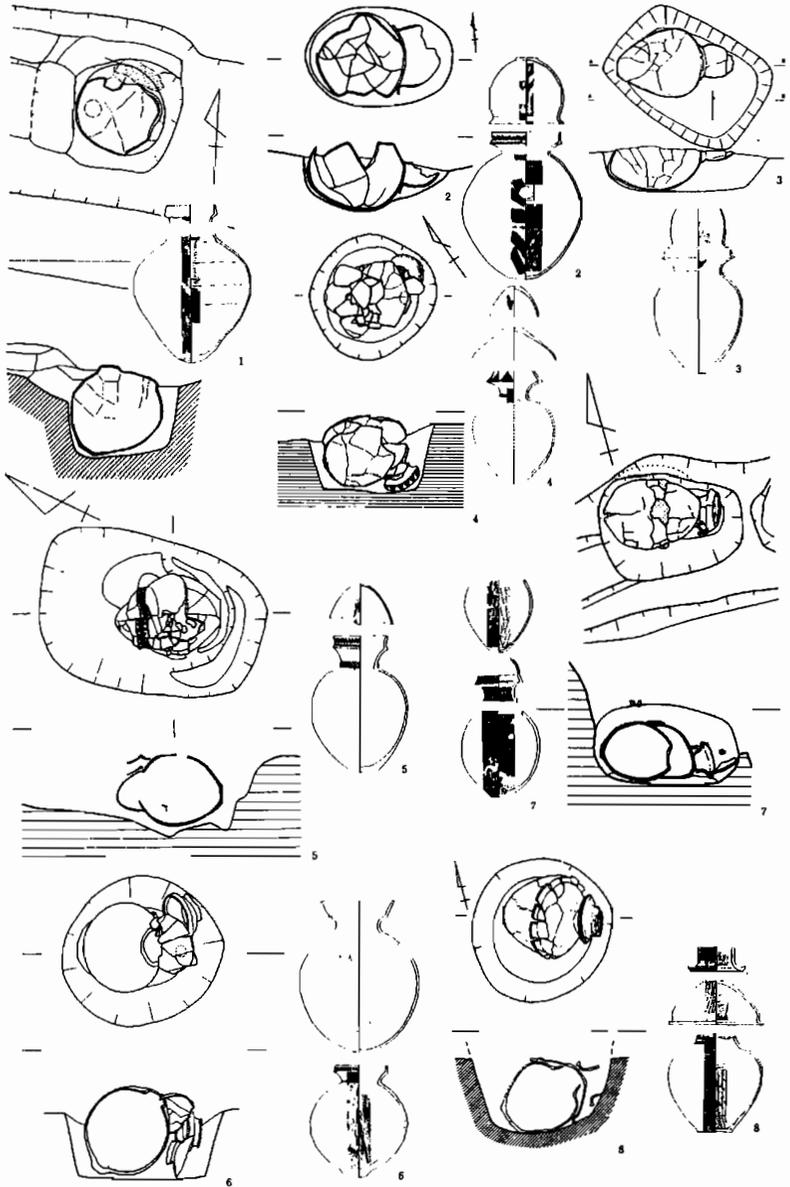
- A類—方形周溝墓・円形周溝墓と立地上関係するもの
 A 1—方形周溝墓・円形周溝墓の主体部として埋置されたもの
 A 2—方形周溝墓・円形周溝墓の溝内・溝底に埋置されたもの
 A 3—方形周溝墓・円形周溝墓よ隣接して埋置されたもの
 B類—土壙墓と立地上関係するもの
 C類—墳丘墓と立地上関係するもの
 C 1—墳丘墓の主体部として埋置されたもの
 C 2—墳丘墓の盛土・墓壇内に埋置されたもの
 D類—古墳と立地上関係するもの
 D 1—古墳の主体部として埋置されたもの
 D 2—古墳の盛土・墓壇内に埋置されたもの
 E類—単一墓制（他の墓制と立地上関係しないもの）
 E 1—単独
 E 2—複数
 F類—住居跡の覆土中・床下・周辺に埋置されたもの
 G類—支石墓と立地上関係するもの
 H類—箱式石棺墓と立地上関係するもの

《器種組成》

- I類—棺身に壺を使用するもの
 I 1—棺蓋に壺を使用するもの
 I 2—棺蓋に甕を使用するもの
 I 3—棺蓋に高杯を使用するもの
 I 4—棺蓋に鉢を使用するもの（台付鉢も含む）
 I 5—棺蓋に石を使用するもの（板石・河原石等）
 I 6—棺蓋が無いもの（＝単棺）
 I 7—棺蓋が不明であるもの（削平・攪乱などを受けている）
 I 8—その他
 II類—棺身に甕を使用するもの
 II 1—棺蓋に壺を使用するもの
 II 2—棺蓋に甕を使用するもの
 II 3—棺蓋に高杯を使用するもの
 II 4—棺蓋に鉢を使用するもの（台付鉢も含む）
 II 5—棺蓋に石を使用するもの（板石・河原石等）
 II 6—棺蓋が無いもの（＝単棺）
 II 7—棺蓋が不明であるもの（削平・攪乱などを受けている）
 II 8—その他

《埋葬状態》

ほぼ直立なものを正位、墓杭に対して横に置かれているものを横位、棺が天地逆に置かれているものを逆位、それ以外を斜位とする。



遺骨：S=1/40
 遺物：S=1/32

図1 「口頸部打ち欠き棺」集成(1) (各文献より、No.は表1と対応)

【追迫遺跡】山口県熊毛郡熊毛町に所在する弥生時代後期の高地性集落である。壺棺5基は群を形成している。2号壺棺は棺蓋に甕を使用し、棺身は壺である。棺身の壺口頸部を打ち欠く。口縁部破片が墓坑内から出土した。時期は弥生時代後期後半と考えられる。

【天王遺跡】(谷口編 1988)

山口県熊毛郡熊毛町に所在する弥生時代後期の高地性集落である。壺棺墓3基は群を形成している。1号壺棺墓は棺蓋に2つの壺底部を使用し、棺身は壺である。棺身の壺の口頸部を打ち欠き、打ちかれた口頸部破片は棺を支える材として墓坑内に納められていた。時期は弥生時代後期後半と考えられる。

【寺迫遺跡】広島県広島市安佐北区に所在する集落跡である。土器棺墓2基と土器蓋土坑墓1基が群を構成している状態で検出された。このうち、2号土器棺墓は壺底部を棺蓋として、壺を棺身として使用する。打ち欠かれた口頸部は棺身と棺蓋との接合部に割って置かれていた。時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

【稗畑遺跡】広島県広島市佐伯区に所在する。第1号土器棺墓は、棺蓋・身ともに壺を使用する。棺身は口頸部を打ち欠き、蓋・身いずれの口頸部も棺身の安定をはかるための部材として墓坑内に埋設されていた。蓋として使用された壺の内外面に赤色顔料が塗布されている。時期は古墳時代初頭と考えられる。

【寺山遺跡】広島県広島市安佐南区に所在する。第2号テラス状遺構上では、土器棺墓2、溝状遺構1、土器群2、焼土面2などが確認された。このうち、第1号土器棺墓は、棺蓋・身ともに壺を使用する。棺蓋と身の間には目張り用の粘土が認められる。棺身は口頸部を打ち欠き、その口頸部は棺身の安定をはかるための部材として墓坑内に埋設されていた。なお、土器棺墓前面のテラス状遺構床面には2ヶ所の焼土面が確認されており、土器群の土器は土器棺埋葬の際の祭祀行為に使用された可能性が高く、床

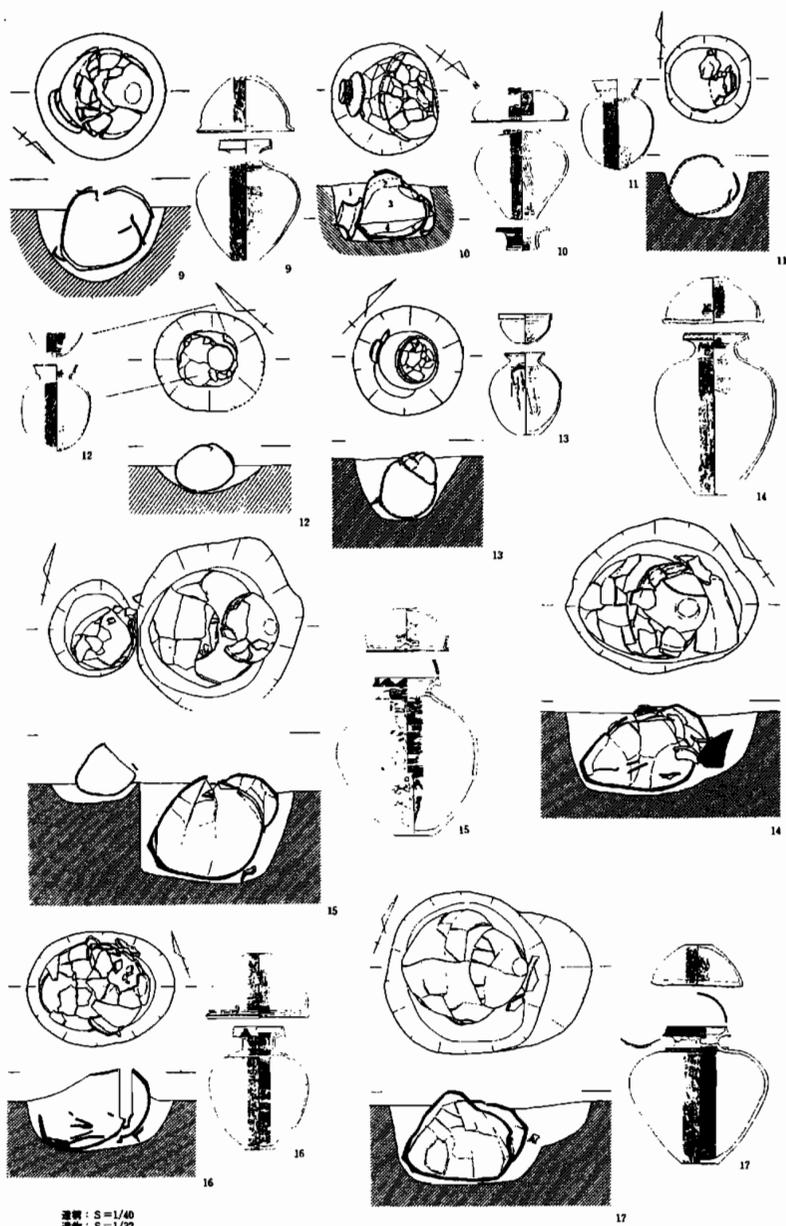


図2 「口頸部打ち欠き棺」集成(2) (各文献より、No.は表1と対応)

面の2ヶ所の焼土面もその際の火の使用によるものと考えられている。時期は弥生時代終末と考えられる。

【百間川原尾島遺跡】岡山県岡山市に所在する。壺棺3基によって群を構成している。左岸用水壺棺Ⅱは鉢を棺蓋に、壺を棺身に使用する。棺身壺は口頸部を打ち欠き、棺蓋の上に置かれていた。時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

【百間川兼基遺跡】岡山県岡山市に所在する。土器棺2は単独で存在しており、鉢を棺蓋に、壺を棺身に使用する。棺身壺は口頸部を打ち欠き、棺の底部側に棺身の安定を図るためか口縁部片が差込まれていた。また、棺身胴部には焼成後穿孔がみられる。時期は弥生時代後期中葉と考えられる。

【鹿田遺跡】岡山県岡山市に所在する。土器棺-2は単独で存在しており、鉢を棺蓋に、壺を棺身に使用する。棺身壺は口頸部を打ち欠き、棺の底部側に棺身の安定を図るために口頸部片が墓坑内に立てかけられていた。また、棺内から生後数ヶ月の乳歯が10数点出土した。時期は弥生時代後期前葉と考えられる。

【津寺遺跡】岡山県岡山市に所在する。西川調査区では古墳時代初頭～前期にかけての土器棺墓計11基が群を構成して検出された（亀山ほか1995）。このうち古墳時代初頭と考えられるものは8基、古墳時代前期と考えられるものは3基ある。このうち古墳時代前期に比定される土器棺墓-13は、壺底部を棺蓋に、壺を棺身に使用する。棺身の壺口頸部を打ち欠き、口縁部破片は墓坑内から出土した。

また中屋調査区で単独で検出された古墳時代前期の土器棺墓-16は、遺存状況が悪いため器種不明とされる土器片で蓋をし、棺身には壺が使用されている。打ち欠かれた口頸部片は、墓坑と棺との間に詰められて棺を固定している。弥生時代終末～古墳時代初頭の土器棺墓-17も単独で検出され、鉢を棺蓋に、壺を棺身に使用する。棺身壺は口頸部を打ち欠き、棺の底部側に棺身の安定を図るためか口縁部片が詰められていた（亀山ほか

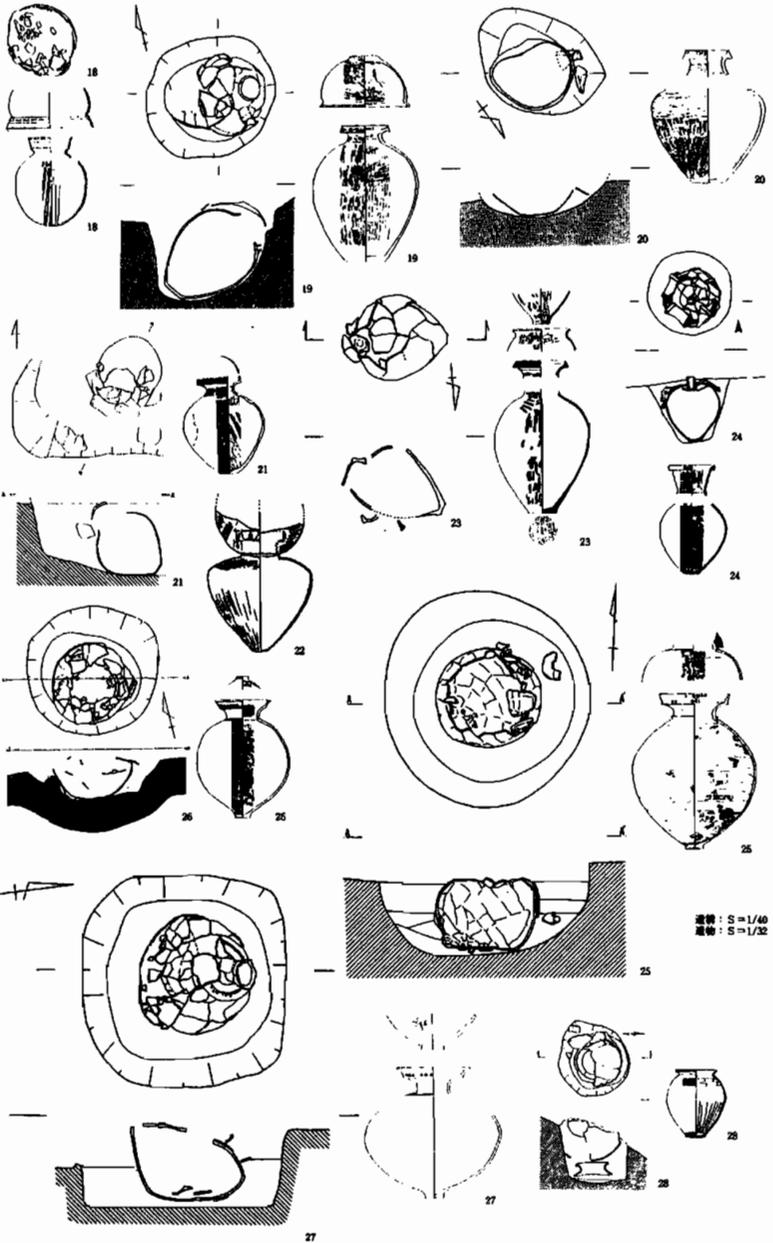


図3 「口頸部打ち欠き棺」集成(3) (各文献より、No.は表1と対応)

1998)。

【加茂政所遺跡】岡山県岡山市に所在する。弥生時代後期の土器棺墓が11基群を構成して検出された。これらのうち、打ち欠かれた口頸部が発見されたものは土器棺墓3、5、7、11の4基である。これらはいずれも弥生時代後期前葉とされ、棺蓋に鉢、棺身に壺を使用している点は共通している。口頸部の利用方法として、棺蓋の側に置かれたもの（土器棺墓3）、棺を支える材としてのもの（土器棺墓5、7、11）とに区別される。また、土器棺墓5の棺身壺胴部には焼成後穿孔が認められる。

【用木第4号墳】岡山県赤磐郡山陽町に所在する古墳時代前期の古墳である。第14主体は土器棺であり、棺蓋に鉢、棺身に壺を採用する。壺は口頸部を打ち欠いて棺蓋として使用し、更に鉢で塞いだものである。壺及び鉢はいずれも山陰系の二重口縁で、棺身壺には胴部に径1cmの焼成後穿孔を施す。

【前山遺跡】岡山県都窪郡山手村に所在する。弥生時代後期の土坑墓及び土器棺墓群である。棺蓋に鉢、棺身に壺を採用し、鉢は内外面に赤色顔料の塗布が認められる。打ち欠かれた口頸部の出土地点は不明である。時期は弥生時代後期中葉である。

【有本遺跡】岡山県津山市に所在する弥生時代後期の土坑墓及び土器棺墓群である。土器棺2は壺を棺身としている。報告者は「口縁部と胴部が接合しないため、口縁部を打ち欠いて蓋として使用していた可能性が考えられる」としているが、土器棺墓は上面をかなり削平されており、別固体による蓋が存在した可能性も充分考えられよう。時期は弥生時代後期前半である。

【稲木遺跡】香川県善通寺市に所在する。土器棺墓4基によって群を構成している。棺蓋に甕底部片を、棺身に壺を使用する。打ち欠かれた口頸部は、墓坑内から出土しているらしい。弥生時代後期後葉と考えられる。

【大井遺跡】香川県大川郡大川町に所在する弥生時代終末～古墳時代初頭

の墳丘墓である。墳丘上に7つの土器棺が埋設されていた。第3号棺は壺を棺蓋・身に使用し、斜位に埋設されていたという。

【下ノ坪遺跡】高知県香美郡野市町に所在する。土器棺墓は2基によって群を構成している。このうち、壺棺2は甕を棺蓋、壺を棺身としている。打ち欠かれた棺身の口頸部は、棺身底部に支脚状に置かれていた。時期は弥生時代後期前葉である。

【池上北遺跡】兵庫県神戸市西区に所在する。弥生時代後期前葉の壺棺墓ST01は、ほぼ直立して埋設されており、棺蓋に高杯、棺身に壺を使用している。打ち欠いた壺口頸部及び高杯脚部は棺の上面に並べるように置かれていた。

【魚崎中町遺跡】兵庫県神戸市東灘区に所在する。第3号土坑は単独で立地し、棺蓋身ともに壺を使用する。報告者は、口頸部を打ち欠いて棺蓋として使用し、更に別個体の土器片で塞いだものと考えている。棺身の胴部下半部には焼成後穿孔が認められる。時期は弥生時代終末頃である。

【口酒井遺跡】兵庫県伊丹市に所在する。第11次調査壺棺墓は単独で立地し、棺蓋に底部片、棺身に壺を使用する。報告者は、口頸部を打ち欠いて棺蓋として使用し、更に別個体の土器片で塞いだものと考えている（森下ほか 1988）。墓坑内に灰褐色粘土を貼り、棺を固定する努力がされる。時期は弥生時代終末頃である。

第25次調査の壺棺1は棺蓋・身ともに壺を使用する。この資料についても報告者は、口頸部を打ち欠いて棺蓋として使用し、更に別個体の土器片で塞いだものと考えている（小長谷 1995）。時期は弥生時代終末である。

【奈カリ与遺跡】兵庫県三田市に所在する。弥生時代中期後葉の2号土器棺は、甕の口頸部を切断し、上半部は口縁部を上向きに墓坑底に置く。その上部に胴をはほぼ垂直に横倒しの状態で埋置している。報告者は棺蓋は後世流失したと捉えている。

【新宮東山1号墳】兵庫県龍野市に所在する。弥生時代終末～古墳時代初

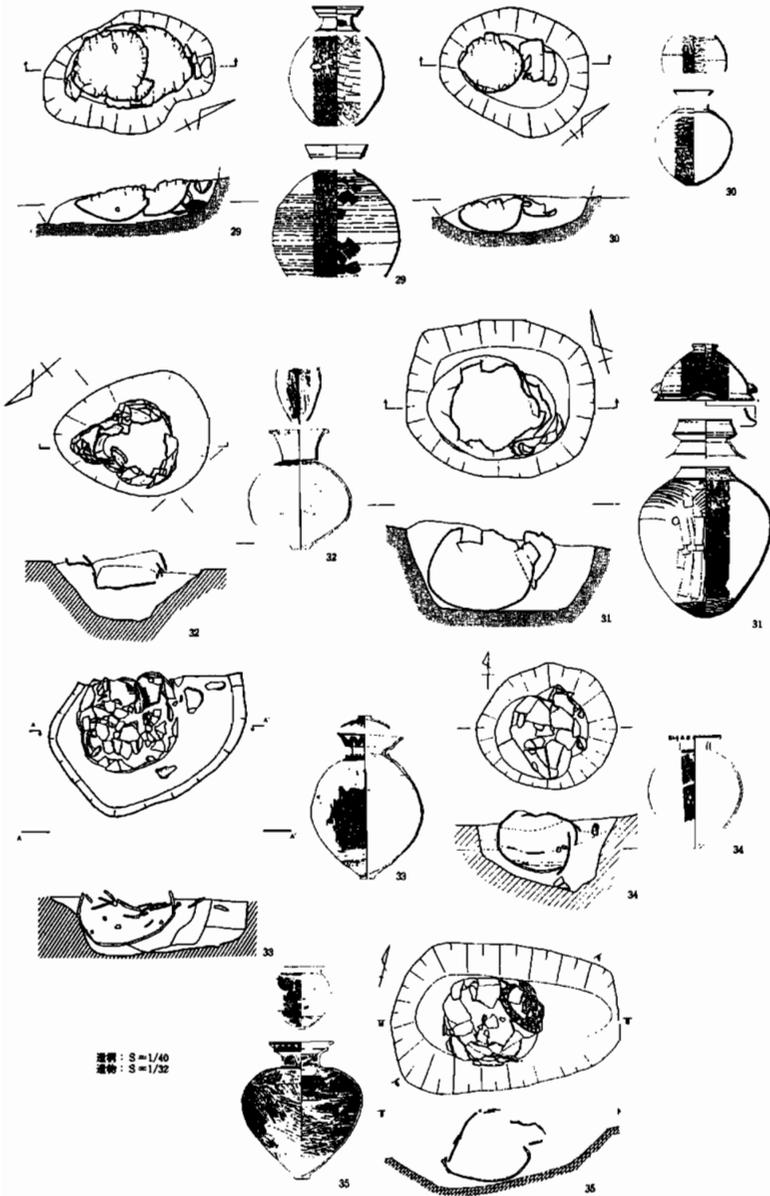


図4 「口頸部打ち欠き棺」集成(4) (各文献より、No.は表1と対応)

頭の墳丘墓である。1～3号土器棺は区画溝を挟んだ墳丘外に近接して埋設されている。1号土器棺は棺蓋身ともに壺を使用する。墓坑内から棺蓋身の口頸部が出土しているが、いずれも胴部とは接合できない。棺身の胴部には焼成後穿孔が施される。2号土器棺は棺蓋身ともに壺を使用する。墓坑内から棺身の口頸部が出土しているが、胴部とは接合できない。3号土器棺は棺蓋に鉢、棺身に壺を使用する。棺内から溶結凝灰岩製の管玉2個が出土した。棺身の口頸部は墓坑内ではなく少し離れた地点で採取された。棺身の胴部には焼成後穿孔が施される。

【巨摩・若江北遺跡】大阪府東大阪市に所在する。3号方形周溝墓は木棺を主体とする弥生時代中期末から後期初頭の墓である。第7主体部は周溝墓方台部に埋設され棺蓋に小型の甕、棺身に壺を使用する。壺胴部に打ち欠いた口頸部をまず被せその上から更に小型甕で蓋をしている。

【東奈良遺跡】大阪府茨木市に所在する。ST-01は単独で存在し棺蓋身ともに壺を使用する。報告者は、口頸部を打ち欠いて棺蓋として使用し、更に別個体の土器片で塞いだものと考えている。時期は弥生時代終末である。

【纏向遺跡】奈良県桜井市に所在する。壺棺は棺身に壺を使用し、棺蓋は削平のため不明である。棺身壺は口頸部を打ち欠き、棺身の安定するための支えとして使用されていたという。時期は弥生時代終末である。

【西山遺跡】奈良県宇陀郡榛原町に所在する。SX-01は台状墓付近で検出された。棺蓋に甕、棺身に壺を使用する。報告者は、口頸部を打ち欠いて棺蓋として使用し、更に覆いきれない部分は別個体の甕で塞いだものと考えている。時期は弥生時代終末である。

IV. 「口頸部打ち欠き棺」の分析

前章でみたように「口頸部打ち欠き棺」は、9府県の27遺跡で35例が知られることがわかった(図5)。続いて、この集成結果を具体的な項目により、分析をおこなってみたい(図6)。

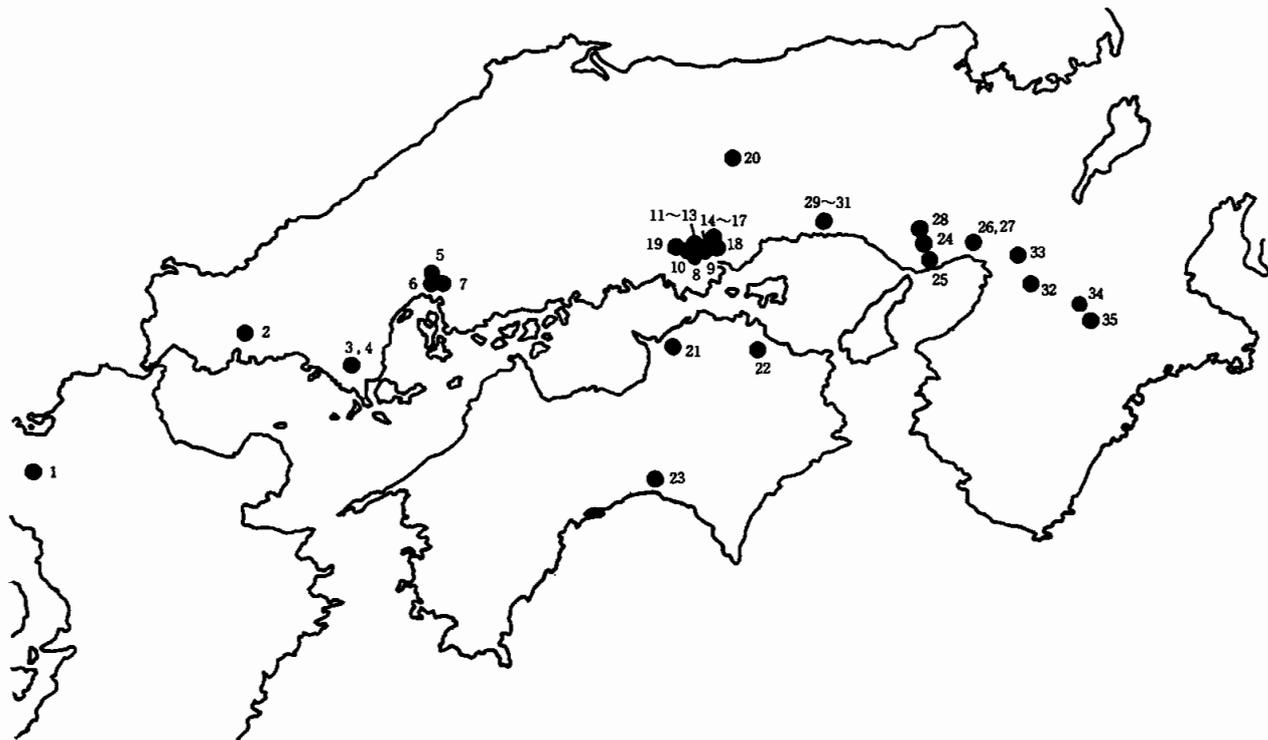


図5 「口頸部打ち欠き棺」の分布

時期	
弥・中・後	1
弥・後・前	7
弥・後・中	7
弥・後・後	3
弥・終～古・初	14
古・前	3
合計	35

器種組成	
I 1	10
I 2	4
I 3	1
I 4	12
I 7	4
I 8	3
合計	34

立地	
A 2	1
B	3
C 2	1
C 4	3
D 2	1
E 1	12
E 2	12
合計	33

埋葬状態	
直位	2
横位	4
斜位	28
合計	34

出土類型	
い	4
ろ	8
は	13
に	8
ほ	2
合計	35

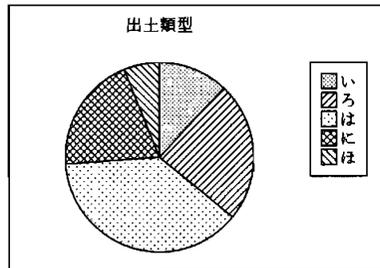
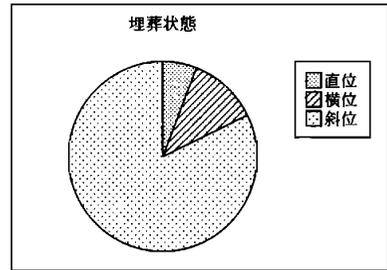
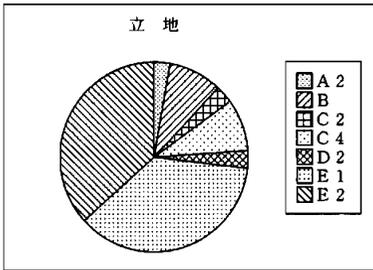
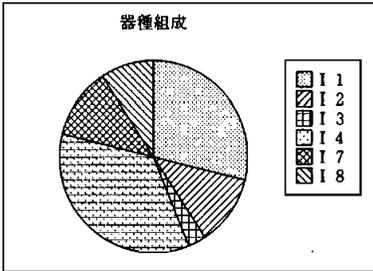
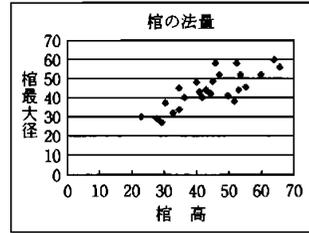
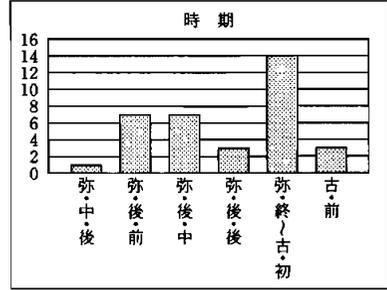


図6 各項目の分析

〔分布〕西は福岡県甘木市立野遺跡から東は奈良県宇陀郡榛原町西山遺跡まではほ山陰地方を除く西日本全域で確認される。現在の行政単位で最も事例が多いのは岡山県である。8遺跡で13例が認められる。次いで兵庫県
の5遺跡8例が多い。

〔時期〕棺身は胴部から打ち欠かれているため、口頸部打ち欠きの範囲で捉えることにはやや難があるが、兵庫県ナカリ与遺跡例は弥生時代中期後半のもので最古である¹⁾。この時期他に事例が無いため、吉備で後期に入ってから多くみられる口頸部打ち欠きの土器棺とは系譜が繋がらないものと思われる。弥生時代後期前葉段階には、岡山県を中心に対岸の香川県、高知県、兵庫県、大阪府で事例が認められる。弥生時代後期中葉段階は、岡山県、広島県に限定される。弥生時代後期後葉段階には山口県でのみ事例が認められる。弥生時代終末～古墳時代初頭段階には岡山県でも事例は存在するが、むしろ広島県、香川県、兵庫県、大阪府、奈良県といった岡山県以外の地域での事例が目立ってくる。そして、古墳時代前期には福岡県と岡山県でのみ事例がある。

〔棺の法量〕棺の法量の計測方法は、残存部の高さを棺高とし、胴部最大径を棺最大径として表記しその関係をみてみた。この結果、棺のサイズには器高・最大径ともに30cm前後の小型のものから60cm前後の大型のものまでまんべんなく存在していることが看取される。

〔立地〕立地ではE1類とE2類が最も多く、土器棺墓という墓制のみによる場合が最もこうした行為が認められることになろう。時期が下り弥生時代終末以降には、他の墓制と関係した土器棺墓にもこうした行為の痕跡が認められるようだ。

〔器種組成〕棺蓋・棺身に使用された土器の器種組成についてみてみよう。すると、圧倒的に壺を棺身として鉢を蓋に被せるものが多い。次いで棺身・棺蓋ともに壺を使用するものが多いことがわかる。

〔出土類型〕口頸部の在り方から、いくつかのパターンに類型化が可能で

ある。い. 棺の上・側に置く ろ. 棺の蓋として使用 は. 棺を支える材として使用 に. 墓坑内から出土 ほ. 全く離れた所から出土に分ち、それぞれの頻度を見てみると、は類が最も多く、次いでろ類とに類が多い。

V. 考 察

前稿で想定したように（角南 1999a）、土器棺葬の際、埋葬地まで遺体と棺は別々に運ばれ埋葬地で入棺されたことが、打ち欠かれた口頸部が様々なパターンで出土する複数の事例があることから明確になった。ここでは、これまでの「口頸部打ち欠き棺」の分析結果をもとに、こうした行為の背景を考えてみたい。

「口頸部打ち欠き棺」は弥生時代後期前葉に岡山県域で出現し、その後瀬戸内地方を中心に広がりを見せる。この段階では出土類型は棺を支える部材として使用されることがほとんどである。その後、分布の中心は近畿地方へと移行するが、近畿地方では口頸部を棺蓋の一部として利用する場合が多く、棺の部材として活用される場合はほとんどない。古墳時代前期にはほとんどが消滅するが、岡山県津寺遺跡土器棺墓-13は集落付近に土器棺墓のみで墓域を形成するタイプであるのに対して、岡山県用木第4号墳第14主体は古墳の墳丘隅に立地し、棺に使用された土器は棺蓋・身ともに山陰系のものである。津寺遺跡例の出土類型はそれまでも見られる墓坑内からであるのに対して、用木例は岡山県南部地域ではそれまで確認されていない棺蓋としての使用であり、これらの行為の意味が全く異なったものである可能性を示唆している。

岡山県域で壺を棺として使用することの意味について少し考えてみよう。「口頸部打ち欠き棺」のような現象が生じるのは、壺を棺身とした場合が圧倒的であり、甕ではほとんど見られない。また今回の集成結果からも土器棺棺身胴部への焼成後穿孔はごく少数しか見られず、口頸部を打ち欠く行為と穿孔する行為は別の次元のものとして考えるべきではないのだろう

か。それでは、何故壺の場合には口頸部を打ち欠くという行為が伴うのだろうか。前述した柳瀬昭彦の言うように、弥生時代中期末には棺身は甕、後期になるとの壺を使用するという変化に起因し、遺体の大きさに規制された結果、壺のサイズを拡大するために口頸部を打ち欠いたとする説（柳瀬 1980）がここで重要な問題となってくる。

このことを具体的に検証するため、岡山県と大阪府の土器棺の器種組成を弥生時代中期後葉、後期前葉、後期中葉、後期後葉に大別して統計してみた（図7）。この結果、大阪府では中期後葉段階に資料が多く、この段階では棺身に甕・棺蓋に鉢を使用することが多い傾向がわかる。また後期になると棺身の主体は甕から壺へと転化するといえる。一方、岡山県では中期後葉段階には資料が少なく、後期前葉から資料は際立って増加する。後期前葉段階では甕を棺身に、高杯を蓋にするものも存在するが、壺を棺身に、鉢を棺蓋にするものが圧倒的である。

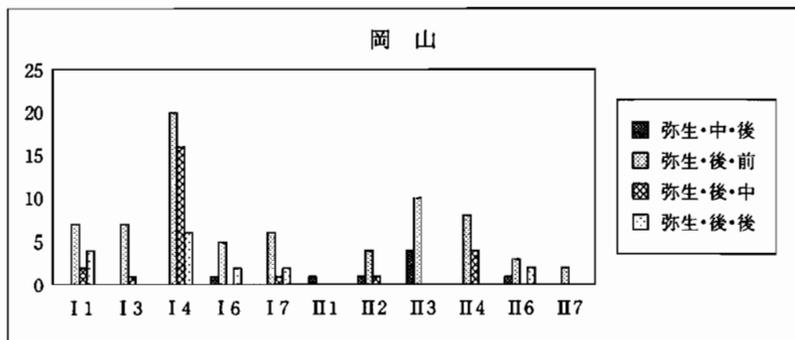
一方、弥生時代中期中葉以降、近畿地方で盛行するのは棺蓋に高杯を使用することである（清水 1998）。この場合、脚部が打ち欠かれていることが多い。この頃から近畿地方では棺の一部として意図的に打ち欠かれた供膳具を使用していた可能性はあるが、大阪府下ではその系譜がうまく繋がらないようだ。今後の検討を要する問題であろう。

しかし弥生時代後期になると、近畿地方でも一部では意識的に高杯を蓋として選択したと考えられる事例が存在しているようだ。例えば京都府竹野郡丹後町の大山墳墓群は、弥生時代後期前葉～後葉にかけての墳墓だが、この墳墓の周辺部に後期中葉～後葉にかけて合計9基の土器棺が埋設されている。これらのうち棺身に甕を使用したものは8基で、1基のみ小型の壺を使用している。また8基が棺蓋に高杯を使用しており、脚部は打ち欠かれている（常盤井・黒田 1983）。

打ち欠かれた口頸部の出土類型について、それぞれの背景を考えてみよう。い類は報告例が少ないが、この口頸部打ち欠きという行為がただ単に

岡山

	I 1	I 3	I 4	I 6	I 7	II 1	II 2	II 3	II 4	II 6	II 7	合計
弥生・中・後				1		1	1	4		1		8
弥生・後・前	7	7	20	5	6		4	10	8	3	2	72
弥生・後・中	2	1	16		1		1		4			25
弥生・後・後	4		6	2	2					2		16
合計	13	8	42	8	9	1	6	14	12	6	2	121



大阪

	I 1	I 2	I 3	I 4	I 6	I 7	II 1	II 2	II 3	II 4	II 6	II 7	合計
弥生・中・後	5	1	4	9	14	5	12	6	1	31	6	6	100
弥生・後・前		2	2	1	1				1				7
弥生・後・中				2	1	1							4
弥生・後・後	3		1	2	1	4							11
合計	8	3	7	14	17	10	12	6	2	31	6	6	122

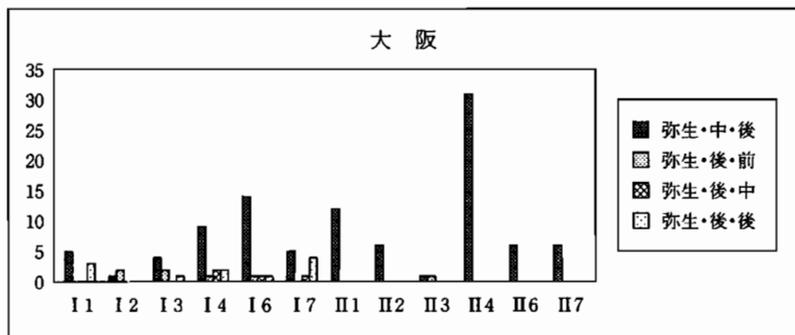


図7 岡山と大阪の土器器種組成の比較

遺体を納めるための口の拡張という理由だけでは話が終わらないことを示唆しているパターンである。兵庫県池上北遺跡の棺蓋に高杯・棺身に壺を使用し、その脚部と口頸部をいずれも打ち欠き棺の上面に並べて置かれていたという事例は、打ち欠かれる棺の器種組成としては近畿的要素と吉備的要素が融合しているようにも捉えられる。また、土器蓋土坑墓でも同様に打ち欠いた口頸部を棺上に置くという事例が、広島県西本B遺跡ではみられ（金井編 1976）、打ち欠いた口頸部や脚部を更に供献した行為と捉えることが可能である。

ろ類はその分布状況が岡山県域以外に多いことから、岡山県域以外の口頸部打ち欠きは、単なる棺蓋を作成するための行為といった岡山県域の背景とは異なっている可能性もある。しかし、打ち欠いた口頸部以外の部材を補強して蓋にしている事例が多い点や、岡山県域に後発する形でろ類が多く見られるようになる点からも、岡山県域の「口頸部打ち欠き棺」の影響を受けてろ類が発生した可能性が高い。

は類は口頸部を再利用しているのだが、わざわざ打ち欠いた口頸部を部材として利用する点に、壺の口頸部に対する執着が垣間見られる。同様に、に類は打ち欠かれた口頸部が偶然に墓坑内に混入したか、口頸部を意識的に埋納した可能性が考えられる。

は類の場合は、口頸部が発掘調査で出土しなくても、意図的に投げ捨てられた可能性が高い。岡山県域で壺を棺身とした場合、口頸部が打ち欠かれたものが多いが、実はこうした資料の多くがは類のような口頸部処理をした可能性が高いとも考えられる。

ではどのような理由で、壺口頸部を打ち欠くという行為がおこなわれたのだろうか。これまで見てきたように、壺口頸部を打ち欠くということは単なる偶然や蓋をすることを簡略化するための行為ではなく意図的に口頸部を落とすためになされた行為と言える。これは弥生時代後期にはいつてからの壺に対する意識の変化と連動していると考えられる。壺という稲魂

を保管する土器（角南 1999c）を棺として使用することによって、「子供」の再生を願ったのではなかろうか。また、打ち欠かれた口頸部と胴部は、そのほとんどがきっちりとは接合しない。これは意識的に元へ戻らないようにした可能性もある。つまり壺の口頸部を打ち欠くという行為は、柳瀬の言うように土器の口を拡張するという実用的意味も持つが、完全な形の壺をわざわざ破壊して遺体を納めるということを考慮するならば、この一連の行為はある種の入棺儀礼の一部と捉えることが可能である。つまり弥生時代中期の日常雑器を転用しただけの棺は、入棺儀礼の一部として棺を壊すということは少なくともされなかったと言えよう。ところが、弥生時代後期になると壺・高杯といった供膳具が用いられ、入棺儀礼の際に口頸部や脚部を意識的に打ち欠くという行為が折と伴うことになったらしい。

これと関連する行為として、弥生時代の土坑墓に副葬されたガラス玉が破損された状態であったり、石鏃の先端が意図的に打ち欠かれていたりする事例がある。これらは死者の入棺儀礼・葬送儀礼と深く関係したと考える説がある（長井・土居 1978, 行田 1985）²⁾。こうした一部を意図的に破壊した副葬品は土器棺の副葬品にみられることがあり、「大人」と同様の入棺儀礼が「子供」の埋葬の際にもおこなわれていたことを想定させる（角南 1999b）。

この問題についていま少し視野を広げて考えてみよう。弥生時代後期後半段階に特殊器台が岡山県域南部で誕生するが、この特殊器台を棺として用いた遺体埋葬が、供膳具を転用した棺の究極な形態としておこなわれることも生じたようだ³⁾。この事実から推測すると、吉備地方では弥生時代後期前半段階に、供膳具が祭祀の中で象徴的な役割を果たすようになり、やがてこれらが葬送儀礼の際にも重要な意味を持つようになる。これは、階層的な墓の特殊化と相互に関係しながら、一方で土器棺葬の際の棺に供膳具としての壺を採用するようになり、他方で墳丘墓上での葬送用の特殊器台や特殊壺の誕生を促していたのではなかろうか。

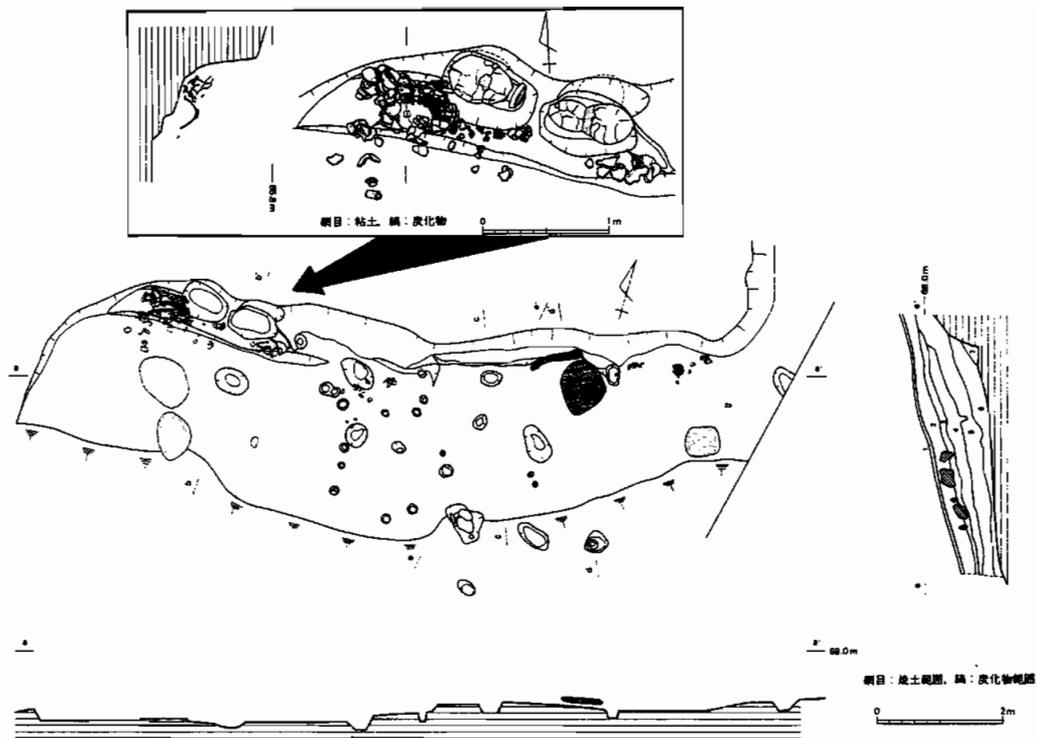


図8 広島県寺山遺跡第2号テラス状遺構土器棺検出状況（高下編1997）

墳頂部供献土器のスタイルを含めた「吉備型祭式」が、弥生時代後期後半～古墳時代初頭に西日本全域へと拡大していくに従って、土器棺葬の際に棺身に壺を採用するケースが多くなったのではなかろうか。この傍証として山陰地方では、弥生時代にはごく少数、集落付近にしか土器棺葬は見られない。しかし、古墳時代前期になると多くの土器棺葬が古墳と関係して見られるようになる。これは畿内との関係からこうした土器棺葬が出現すると説く説もある（松本 1986）。山陰地方の土器棺には、「口頸部打ち欠き棺」は一例も存在せず、口頸部が意図的に打ち欠かれることもほとんど無い。この点で、先の岡山県用木第4号墳第14主体の棺は蓋・身ともに山陰系土器を使用しているが、「口頸部打ち欠き棺」である点は非常に興味深い。

また広島県寺山遺跡例の、土器棺付近で検出された焼土面は、土器棺の入棺儀礼前後に、ここで火を用いた儀礼がおこなわれたことを暗示している（図8）⁴¹。つまり入棺儀礼終了後も、土器棺の盛土が土饅頭状に隆起していた可能性が考えられ、人々はこれを墓としてしばらくの間は認識することが可能であったことを窺わせる⁵¹。入棺儀礼終了後も様々な儀礼が墓前でおこなわれた可能性は高く、この焼土面はその時の儀礼の痕跡とも理解できる。

以上の議論と先に設定した仮説を踏まえて、「子供」の死から埋葬に至るプロセスを和田晴吾の「古墳の築造過程」モデル（和田 1989,1995）を参考に模式化してみよう（図9）。



図9 土器棺葬における儀礼過程

まず埋葬地の選択がおこなわれる。特定の集団墓へ土器棺が埋葬される

場合は、埋葬地の選択は省略されることになる。続いて整地がおこなわれるが、古墳の場合とは異なり、地均し程度のものであったと考えられる。続いて墓坑を掘削し、棺として使用される土器が埋葬地へと運搬される。このうち壺や高杯の場合は口頸部や脚部の打ち欠きという儀礼的行為がおこなわれる。打ち欠かれた口頸部や脚部は基本的に付近に投げ捨てられたり（これも入棺の際の儀礼行為と捉えられる）、棺を支える部材として利用されたり、墓坑内に埋葬されたり、棺上に意識的に置かれたりする。次に埋葬地へと運ばれた遺体が入棺される。続いて棺は埋められ、盛土がされ、土器棺入棺儀礼は一応完了する。更にこの後、木や石で墓標が置かれる場合もある。この後、例えば広島県寺山遺跡のように、火を焚いて死者を送る儀礼が引き続きおこなわれるというケースと多々あったと考えられる。

VI. まとめ

本稿では、口頸部を意図的に打ち欠いたと考えられる土器棺の事例を集成し、その在り方について分析を試みた。この結果、土器棺葬の場合にも遺体は棺とは別々に埋葬地まで運ばれたことが判明した。またこのような事例の出現は弥生時代中期後半から後期にかけての、土器棺葬の使用器種の転化と連動し、どうやらこうした壺の口頸部への打ち欠き行為は土器棺へ被葬者を入棺する際の入棺儀礼の結果である可能性が高いことが判った。このことはつまり、「子供」の埋葬である土器棺葬の際にも、きっちりと「大人」と良く似た入棺儀礼がおこなわれていたであろう可能性を追求するための材料となろう。

また報告書では、土器棺に意図的な打ち欠き行為があったとしても、その破片が出土していれば、接合して報告されることもあると思われる。このような場合には、土器棺に対する意図的な打ち欠きという行為、つまりが入棺儀礼の痕跡の情報が霧散してしまうことになる。将来、土器棺を調

査する際には棺の破片がどういった状態でどこから出土したかを正確に捉えようとする認識が必要になってくるであろう。

謝辞 本稿作成に際しては水野正好先生、藤澤典彦先生の御指導を賜った。また以下の方々からも有益な情報や御指導を賜った。記して感謝したい。(文章中敬称略)

片桐孝浩、金田善敬、狭川真一、笹川龍一、佐藤亜聖、中野雅美、松田朝由、牟田華代子(順不同・敬称略)

(文化財史料学専攻博士後期課程 4年)

【註】

1) 本稿では、北部九州の甕棺分布圏の弥生時代の資料は取り扱っていない。成人用甕棺では、棺蓋(上甕)の口頸部が打ち欠かれている場合が多い。これらの中には打ち欠かれた口頸部が棺蓋の外側に据えられていたり、棺身に落ち込んでいたりして出土することもあるという。これらの事例は、遺体入棺後、蓋をする際に棺身との組み合わせの状況に応じて現場で口頸部を打ち欠く場合が多かった事を示しているとされる(橋口 1978)。

福岡県糸島郡二丈町大坪遺跡弥生時代前期の1号、11号甕棺は棺身に壺を用いており、遺存遺体から1号は小児用と考えられる。これらの棺身の口頸部は打ち欠かれ、口頸部は棺の支えに利用している。また1号甕棺は棺蓋に使用した壺も同様に口頸部を打ち欠いている(橋口 1995)。この事例を踏まえれば、棺身に壺を用いる弥生時代前期前葉段階には棺身の口頸部を打ち欠くという行為が見られるようだが、弥生時代前期中葉以降の甕を棺身とした成人用棺成立段階には棺蓋の口頸部の打ち欠きが主体となるといえそうだ。このことは、成人棺成立以前は壺を棺身として使用するため口頸部を打ち欠くことに意味があった、つまり「子供」の土器埋葬と口頸部を打ち欠くという行為は連関しており、葬送儀礼の結果と考えることも可能ではなかろうか。それが成人用棺成立以降は、棺蓋(上甕)を埋装地で打ち欠くという行為に形を変えて存続したのではないだろうか。このように理解するならば、棺蓋の埋装地での打ち欠きはただ単に組み合わせの状況に対応させるための行為ではなく、極めて祭祀的行為ではなかったかと思われる。

このことを補強する事例がいくつかある。一例をあげると、福岡県久留米市安国寺遺跡の弥生時代中期中葉後半の壺棺K11は、口頸部が打ち欠かれており、その口

頸部は2 m程離れた4号祭祀土壇から廃棄された状態で出土した(萩原ほか1983)。これは口頸部打ち欠きという行為と葬送儀礼との関係を強く示した事例ではなからうか。

- 2) 長井数秋と土居陸子は、愛媛県松山市西野Ⅲ遺跡の弥生時代前期前半～中葉の土坑墓から出土した遺物を考察している。これによると、出土した土器はあらかじめ破片が副葬されたとし、石鏃は意図的に先端を欠いている。またサヌカイトの剝片が出土したが、これも副葬品であると考えた。この背景に死者と同様、石器、土器の生活を絶つことに由来しているのではないかとした(長井・土居1978)。また、行田裕美は岡山県津山市西吉田遺跡の中期の土坑墓を分析する中で、石鏃の先端部分が欠損していることに注目し、これを埋葬に際する折損石鏃供献という祭祀行為の結果と考えた(行田1985)。
- 3) 岡山市長坂1号墳では、墳頂部から「特殊な器台」を転用した器台棺1基が検出された。この器台が埋葬されたのは棺の部材として利用された土器から弥生時代後期後葉と考えられる。これ以外に岡山県下では特殊器台を転用した棺が真備町西山遺跡と総社市宮山遺跡で知られるが、これらはともに古墳時代前期に転用された可能性が高いという(草原1999)。
- 4) 火を使用した葬送儀礼は、方形周溝墓では土器などに付着した煤や(大庭1992)、周溝内などから出土した炭化物(福田1994)などによって実際におこなわれていたことが指摘されている。
- 5) 土器棺葬の盛土を発掘調査によって確認することは非常に困難であるが、大阪府東大阪市西ノ辻遺跡(弥生時代中期)(芋本1992)、広島県船木遺跡(弥生時代後期)(潮見1959)等、少数ではあるがその可能性が考えられる例が存在している。

【引用・参考文献】

- 芋本隆裕 1992『西之辻遺跡第23次発掘調査報告書』 東大阪市教育委員会・(財)東大阪市文化財協会
- 井守徳男編 1983『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書』Ⅱ 兵庫県教育委員会
- 岩田明広 1996『魚崎中町遺跡(第3次調査)』 神戸市教育委員会
- 大庭重信 1992『弥生時代の葬送儀礼と土器』『待兼山論叢』26 大阪大学文学部
- 小郷利幸 1998『有本遺跡・男戸嶋遺跡・上遠戸嶋遺跡』 津山市土地開発公社・津山市教育委員会
- 金井亀喜編 1976『西本遺跡群』 広島県文化財協会
- 亀山行雄 1995「土器棺墓について」『津寺遺跡』2 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会

- 亀山行雄ほか 1995『津寺遺跡』2 日本道路公団広島建設局岡山工事事務所・岡山県教育委員会
- 亀山行雄ほか 1998『津寺遺跡』5 日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会
- 岸本道昭編 1996『新宮東山古墳群』 龍野市教育委員会
- 草原孝典 1999「長坂1号墳出土の特殊な器台について」『長坂古墳群』 岡山市教育委員会
- 楠元哲夫編 1987『野峠遺跡群』II 奈良県教育委員会
- 神原英朗 1975『用木古墳群』 山陽団地埋蔵文化財調査事務所
- 小長谷正治 1995『口酒井遺跡発掘調査報告書第22次・25次調査』 伊丹市教育委員会
- 児玉真一編 1984『九州横断自動車関係埋蔵文化財調査報告』5 福岡県教育委員会
- 潮見 浩 1959「山陽地方における弥生時代の墓制」『古代学』8-2 (財)古代学協会
- 清水真一 1998「西日本の土器棺」『弥生人のタイムカプセル』 福岡市博物館
- 菅本宏明 1986「池上北遺跡」『昭和58年神戸市埋蔵文化財年報』 神戸市教育委員会
- 菅原康夫 1993「吉備型祭式の波及と受容」『真朱』2 (財)徳島県埋蔵文化財センター
- 角南聡一郎 1999a「西日本の土器棺墓と埋葬遺体」『奈良大学大学院研究年報』4 奈良大学大学院
- 角南聡一郎 1999b「土器棺の副葬品」『文化財学報』17 奈良大学文学部文化財学科
- 角南聡一郎 1999c「弥生～古墳時代前期の籠目・籠形土器」『香川考古』7 香川考古刊行会
- 角南聡一郎 n.d.「土器棺葬の変容」『溝咋遺跡』 (財)大阪府文化財調査研究センター
- 高下洋一編 1997『寺山遺跡発掘調査報告』 (財)広島市歴史科学教育事業団
- 谷口哲一編 1988『天王遺跡』 日本道路公団徳山工事事務所・山口県教育委員会
- 出原恵三編 1998『下ノ坪遺跡』II 野市町教育委員会
- 常盤井智行・黒田恭生編 1983『大山墳墓群』 丹後町教育委員会
- 長井教秋・土居陸子 1978「IV総括」『愛媛県営総合運動公園関係埋蔵文化財調査報告書』I 愛媛県教育委員会
- 西岡達哉ほか 1989『稲木遺跡』 香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 萩原儀征 1982『纏向遺跡』 桜井市教育委員会
- 楢垣栄次 1977「6. 寺迫遺跡」『高陽新住宅市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 広島県教育委員会

- 濱野俊一・中東正之 1991「東奈良(90-1)HNG-7-C・G・K地区」『茨木市埋蔵文化財発掘調査概要平成2年度』茨木市教育委員会
- 平井勝編 1996『百間川兼基遺跡2・百間川今谷遺跡2』建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会
- 平井泰男ほか 1999『加茂政所遺跡・高松原古才遺跡・立田遺跡』日本道路公団中国支社津山工事事務所・岡山県教育委員会
- 深江英憲 1994「弥生時代畿内土器棺墓の研究」『文化財学論集』文化財学論集刊行会
- 福田 聖 1994「方形周溝墓と火」『戸田史市研究』9 戸田市
- 福原茂樹 1992『神畑遺跡発掘調査報告』(財)広島市歴史科学教育事業団
- 間壁霞子 1995「特殊器台棺と初期円筒棺」『神戸女子大学文学部紀要』28-1 神戸女子大学文学部
- 松本岩雄 1986「墳丘出土の大形土器」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会
- 三好孝一ほか 1995『巨摩・若江北遺跡発掘調査報告』(財)大阪文化財センター
- 六車恵一 1961「讃岐における合口土器」『香川県文化財協会報』5 香川県文化財協会
- 物部茂樹編 1997『前山遺跡・鎌戸原遺跡』岡山県教育委員会
- 萩原裕房ほか 1983『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書』2 久留米市教育委員会
- 橋口達也 1978「(2)弥生時代の遺物 A 甕棺」『九州縦貫自動車関係埋蔵文化財調査報告』XXV 福岡県教育委員会
- 橋口達也 1995『石崎地区遺跡群大坪遺跡』二丈町教育委員会
- 藤澤典彦 1998「死者のまつり」『日本の信仰遺跡』雄山閣
- 森下英治ほか 1988『口酒井遺跡』伊丹市教育委員会・(財)古代学協会
- 山本明彦ほか 1983『朝田墳墓群』VI 山口県教育委員会・建設省山口工事事務所
- 山本一朗・前島高雄 1978『追迫遺跡』山口県教育委員会
- 山本悦代ほか 1988『鹿田遺跡』I 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター
- 柳瀬昭彦ほか 1980『百間川原尾島遺跡1』建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会
- 行田裕美 1985「弥生時代中期土墳墓について」『西吉田遺跡』津山市教育委員会
- 和田晴吾 1989「墳墓と葬送」『古代史復元』6 講談社
- 和田晴吾 1995「棺と古墳祭祀」『立命館文学』542 立命館大学人文学会

